



平成22年 2月24日

市民シンポジウム「ハイチ いのち 生きる力」の開催について

1月13日に発生したハイチ大地震の被災地で、日本の国際緊急援助隊医療チームの一員として、約2週間にわたって活動した本学教員とNPO法人の代表者が、被災の現状と支援活動の状況、劣悪な環境の中で懸命に生きる人々の様子などを報告します。

今回の報告を通して、復興に向けて「私たちに何ができるか」を市民の皆さん一人ひとりが考え、支援の輪が広がっていくための一助となることを願い、次のとおりシンポジウムを企画しましたので、皆様ご参加ください。

1. 日 時：平成22年2月27日（土） 13：00～15：00
2. 会 場：長崎大学医学部第一講義室（長崎市坂本1-12-4）
3. 対象者：一般市民（大学生、高校生を含む）
4. 次 第：
 - (1) 学長挨拶 片峰 茂学長
 - (2) 講 演 1 小田哲也（NPO法人箱崎自由学舎ESPERANZA代表）
 - (3) 講 演 2 山本太郎（長崎大学熱帯医学研究所教授、国際連携研究戦略本部副本部長）
 - (4) 質疑応答
5. 問い合わせ先：国際連携研究戦略本部 松田、松尾
電話：095-819-7008
E-mail：cicorn@tm.nagasaki-u.ac.jp

※ 詳細情報及びリーフレットはこちらにあります。

URL：<http://www.cicorn.nagasaki-u.ac.jp/>

長崎大学主催市民シンポジウム

ハイチ いのち 生きる力

日 時：2010年2月27日(土) 13:00～15:00

場 所：長崎大学 医学部第一講義室 (長崎市坂本1丁目12-4)

参加対象者：市民の皆様 (大学生、高校生を含む)



(写真：JICA 提供)



参加費 無料
事前申込不要

プログラム

- 13:00～13:10 長崎大学長挨拶 片峰茂学長
- 13:10～13:50 講演1 小田哲也 (NPO 法人箱崎自由学舎 ESPERANZA 代表)
- 13:50～14:30 講演2 山本太郎 (長崎大学 熱帯医学研究所教授、国際連携研究戦略本部副本部長)
- 14:30～15:00 質疑応答

概 略

1月13日(日本時間)に発生したハイチ大地震は、死者数23万人、被災者数300万人以上に上る甚大な被害をもたらしました。発生以来、国際社会による様々な緊急支援が行われていますが、復興への道筋は見えていません。

本シンポジウムでは、1月16日から約2週間、日本の国際緊急援助隊医療チームの一員として現地で活動した長崎大学の教員とNPO法人の代表者から、「いのち」と「生きる力」をキーワードに、被災の現状と支援活動の状況、そして劣悪な環境の中で懸命に生きる人々の様子などを報告します。

ハイチは西半球で最も貧しい国です。復興には、市民レベルを含む国際社会の中長期的な支援が必要となります。今回の報告を通して、復興に向けて「私たちに何ができるか」を一人ひとりが考え、支援の輪が広がっていくための一助となることを願い、本シンポジウムを企画しました。

アクセス

- 長崎駅前から
(長崎バス)
8番(医大経由または江平経由 下大橋行)に乗り、
医学部前下車、徒歩5分
(路面電車)
赤迫に乗り、浜口町下車、
徒歩10分

坂本キャンパス
構内地図



小田 哲也 NPO 法人箱崎自由学舎 ESPERANZA 代表

私立高等学校教諭を7年間経験後、JICA 青年海外協力隊員として南米コロンビアの少年院で青少年教育・更生活動に3年間従事。その後4年間、JICA 企画調査員、JICA フォローアップ調査員として、中米・カリブ地域（ドミニカ、ニカラグア、ジャマイカ）で国際協力活動に携わる。帰国後、多くの人たちに途上国の良さや日本人が忘れつつあるものを少しでも感じてもらうと、小学生から社会人までを対象に様々なワークショップを実施。さらに、子供たちと一緒に過ごしたいという思いから、不登校・ひきこもりになった中高生の居場所「NPO 法人箱崎自由学舎 ESPERANZA」を福岡市東区に設立。今回のハイチ大地震では、国際緊急援助隊医療チームの医療調整員として派遣された。

山本太郎 長崎大学熱帯医学研究所教授（国際連携研究戦略本部副本部長）

医学博士。専門分野は国際保健学。大学院修了後、長崎大学熱帯医学研究所助手として勤務。その後、JICA ジンバブエ国感染症対策プロジェクト・チーフ・アドバイザー、京都大学大学院医学研究科助教授、ハーバード大学公衆衛生大学院特別研究員を経て、2003年から約1年間、コーネル大学医学部客員助教授としてハイチ・カポジ肉腫・日和見感染症研究所で勤務。帰国後、長崎大学熱帯医学研究所助教授、外務省国際協力局課長補佐を経て、2007年10月に長崎大学熱帯医学研究所教授に就任。同年12月から、長崎大学の国際戦略のドライビングフォースである国際連携研究戦略本部の副本部長を兼任。2008年1月には、ハイチ滞在時の医療活動の記録とハイチへの思いを綴った著書「ハイチ いのちとの闘い」（昭和堂）が出版された。

ハイチ共和国（首都：ポルトープランス）は、カリブ海と北大西洋の境界に浮かぶイスパニユーラ島西部に位置する。国土面積は27,750km²。地勢特性は、岩の多い山々と大きく隆起した台地、そして、沿岸部の平野や谷間を流れるわずかな川である。4～6月と8～11月の雨期にはハリケーンが発生、乾季の乾燥は特に東部山地の半乾燥地域で著しい。気温較差は北東貿易風の影響で小さい。主に、プランテーションによるコーヒー、サトウキビ、バナナの生産を行う。漁業や鉱業は小規模である。人口961万人のうち70%近くが小規模な農場を持つが、自給率は低い。国民の80%は貧困層で、世界で2番目に貧しい国として挙げられる。6歳から11歳まで無償で義務教育を受けられるが、識字率は低い。公用語はフランス語およびハイチクレオール。音楽が娯楽とメディアの役割を果たしている。

西アフリカなどに出自するアフリカ系が国民の95%を占める。ムラートやフランス、スペイン系白人が5パーセント。1804年に世界初のアフリカ系共和制国家として独立。国旗の色彩は旧宗主国フランスのトリコロールから採用し、アフリカ系住民とムラートの団結を表象する。青と赤の水平の2本帯の中央に配した白色の長方形の中に、両側に旗と2門の大砲の並ぶ椰子の木がたつ。椰子が根を張る緑の草地には“L'UNION FAIT LA FORCE（団結は強さを作る）”と記したスクロールがのびる。

